

なしと雖も只古き遺風を存するに過ぎざるのみ。
●音頭の歌曲 左の伊勢音頭は中世唄ひしもの、由にて何人の作なるやは知らず。

●花八鳥 世に晴れて漏さぬ水や天の川、流れの里を西の海、みちくる客の時の聲、幫間末社はから立の、二階の梯子坂落し、上戸を源平に花車の采配ふる團扇風のたてにのうれ人の旗懸へす後陣にもつ花のはさき組板の前に漲る水もみの、沖の方より引舟が、招く扇子に風うけて皆紅の袖襦にふり出す足の八文字、今様ならで三下りさんや屋みちに一嵐とよとしたれ柳の細道を何時もさんさつれてさんさく女浪がよればとんとよせて、引き使ふたる禿矢はまだ若ければ張強さかくれなす野の鈍り聲わくれしものと夕陽のあはれ二八の初いくさ、床も無官の太夫職、我うけ出さんと編笠も熊谷笠の底深き思ひは散らぬてまかねの露二打三打打ておけしやんと渚の大戸口仲居の役の飛んで出て思ふおてきなれば逃さじものと引きとめる頭巾のしころばこなたに泊れば客は遙に行き過ぎて足の早さをはめければ心の強い御方ぢやと笑ふてこそは別れけれ、夜明の鳥のへ
●座敷すいめ 雪に來て月にあかしつ花にくれ、風に

も遊水無月の、四條河原の夕景色、庭に移せばこも又、加茂の流に枝つけて、笈の音の猶涼し、川の瀬も鳴る夜半も、なれば、時計も軒の風鈴も、晝の祭のしやがりかど、聞けば二上り三下り、二階の涼み引出の、西も東もまくふけて、兩石垣の如くにて、障子に歩む影法師、座敷踊の輪にめぐる、車に向ふ三味線は、かまきり山と思はる、長刀鉢になげ島田、雞ばこに後帯 結び下けたる山鳥の、尾は夏の夜も長々と、獨寝すれば明けかぬる、口舌のあとの蚊屋の内も、へきては胸も、燃、きてはまだ夜が深い、なせ打ち解けぬ、解けて流る、蠅蠅の、しんき晴しに見て廻る、一と聞くは夜芝居の、手づま軽口讀賣の、繪草紙にさへ覺えのふし、穴あるを幸ひに、爰はのどきのからくりと、悪口いへばひととして、部屋唐紙ふわりと、明いて、月に恥かし、夕化粧鏡にうつる、燈火は星か簀の挿え込みの、離座敷の四疊半、九尺くど見せ物の、孔雀はすむと濁るにて、くす水賣のしら聲も、西瓜にとぼす赤紙も、夜の錦のはし賣の、裸人形見るやうに、すむ氣儘の障子越、もじに見えずく入ばくろ、之を命の洗濯と、水も都の和らかに冷した瓜も一時に、榮花にういて垢ぬけて、流れの末の末までも濁

らぬ御代のへ

●菊の壽 (杉本屋) 神風の、伊勢の古市ふるること、其の山水を今こゝに、汲てぞしるさ菊の酒、飲みて時めき氣もつかれ、さいつ抑へつ杯の数も八重菊八重かさなれば、しどけなりふも亂菊の、裾の紅きてばらくと、はぎの白菊あらはになれば、仙家の客はよそにのみ、見てや止みなん床入は、暫し岩戸の戀の間はやせやはやせ笛太鼓、鼓が岳の鶴の聲、ひく三味線やこ箱の、二見とけさは別れても、夕べは又も鸚鵡石いとしと云へばいとしと答ふ、流れの身にし五十鈴川、清き心のまことづく、ねやの睦言いひ過て、唇さむし秋の風あちら向たる片葉のあし、のびんとすねては見すれども、中直り濱林の、濃の真砂の盡せぬ縁し、二つ枕のいなあふせ、せり屏風の内は何事のおわしすかは知らぬども、有がたさには萬年の後の命は君次第ぢやらくりくらの千早振、神のかしこき恵をこめて、何時までも菊の宿を久しき。



京都歌謠

清水繁太郎

京都に於ける羽つきの歌は、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
五んばに、六かど、七くさ、八じかみ、
九ねんばに、十がらし。
又手鞠歌は左の如し。但し一節毎の終りに「此じらかいな」をつけるものもあり。
一ツとせ、人も通らぬ山中を、お小夜と源兵衛の色ばなし、サ、色ばなし。
二ツとせ、二股大根が離れても、お小夜と源兵衛は離りやせぬ、サ、離りやせぬ。
三ツとせ、見たい會たい顔見たい、納戸の障子が開てはし、サ、開てはし。
四ツとせ、用もない門二度三度、お小夜に會とて又一度、サ、又一度。
五ツとせ、何日もはやらぬ簪を、お小夜にさして品を見る、サ、品を見る。

六ツとせ、無理に絞めたる腹帯を、絞めて下され源兵衛さん、サ、源兵衛さん。
 七ツとせ、何事ないと思てたが、此月やお小夜の産月で、サ、産月で。
 八ツとせ、小兒が出来たら見てお呉れ、ほんに源兵衛さんによろ似てる、サ、よろ似てる。
 九ツとせ、此處で死だら何處で逢は、地獄極樂道で逢は、サ、道で逢は。
 十とせ、徳利さげて酒買に、これも源兵衛さんの機嫌酒、サ、機嫌酒。
 十一とせ、一々わたしが悪かつた、許して下され源兵衛さん、サ、源兵衛さん。
 十二とせ、二八薬師に願かけて、お小夜のや、子がまめのよに、サ、まめのよに。
 十三とせ、十三参りの留主の間に、お小夜を……
 十四とせ、新々島田に髪結ふて、赤い丈長いちや結び、サ、いちや結び。
 十五とせ、五人男をならべても、中で好いのは源兵衛さん、サ、源兵衛さん。
 十六とせ、六々首がにゆつと出て、怖やおそろし源

兵衛さん、サ、源兵衛さん。
 十七とせ、質に置たる纏子の帯、受けて下され源兵衛さん、サ、源兵衛さん。
 十八とせ、八萬地獄へ今落ち、助けて下され源兵衛さん、サ、源兵衛さん。
 十九とせ、九人女をならべても、中で好いのはお小夜さん、サ、お小夜さん。
 二十とせ、今日は二十一弘法さん、つれて下され源兵衛さん、サ、源兵衛さん。

伊萬里の手鞠唄

伊萬里 古澤 橋江

わが、肥前國西松浦郡伊萬里地方の手鞠唄を報道すお正月 お子供衆の御慰にもならばやとて、
 ◎宅の御母様なせ飯たべぬ、腹が御痛で關所の腹よ、向ふ通るは御醫者でないか、御醫者なれども薬箱持たぬ、薬小屋なら、山谷おじやれ、山田権現畑端柳、それをせんじて飲ませてみれば、腹に居る子はどんどと下る。

◎向ふ通るは源太郎でないか、小鐵砲ひつ擔ひで小差さして、誰を規ふか姉さん規ふ、姉は何處家の糸屋の娘、糸屋一番伊達者で御座る、裝飾の替に帯買ふてやろか、帯に短し、褌に長し、木綿四五反ばかり、京で洒して大坂で染めて、染めた残を小蝶に着せて、着せてならせて後から見れば、
 丁度御寺の御花の如る。
 ◎もうし、もうし御客さん、煙草一斤買ひなされ、煙草買ふより御寺参り、御寺をこここはんこ寺、はんこのうしろに子が出来た、其子は七つな、のささ、御馬の上から飛びおりて五尺の杖に入れ置て、兄から貰た京の筆。

佐伯の子供唄

南豊 芦家四凸坊



南豊佐伯の子供唄を記さんに、
 ○坊様頭に蠅がどまつた、江で轉で腰よ投げた。
 ○イ、チク、タイチク、タイマイノオ、猪口はニクタ

鞠唄

○オジーヤミ、オ二タ、オ三イ、オ四オ、オ五ツ、オ六ウ、一ト寄せ、二タ寄せなつてくれ、トンギリ、オ一トこぼし、こぼし、こぼし、トンギリ、オ二タこぼ

イナ、橋の上の菖蒲は誰が植た、菖蒲かイタイドノ、タイドノ、タイが、子息の梶原源八ノコヌタ太郎左右衛門よ。
 ○京、京、京橋、橋詰の紅屋のお方の染物は、扱ても扱ても能う染まる、アンドン車に水車、水が無いとてお江戸行き、お江戸長崎橋よ掛けて、申し申し小供饅頭、何となく、コ、信濃の善光寺、善光寺様に願立て、梅と櫻を上げましよ、梅は酸で嫌はれて櫻はよいと賞められた、オテ、コナンナラ一ツタイジーヤ。

○白鷺やア、白鷺やア、今度初めて伊勢参宮、伊勢の町程廣ければ、一夜のお宿を借りてめて、濃の小松の二ノ枝に、柴を刈よせ葉ウ組んで、十二の卵を産み揃へ、親子諸共立つ時は、金の盃黄金の銚子、中で酌取る福の神、福の神。